

ふれあい

大代地区コミュニティ推進協議会

事務局；大代地区公民館 ☎ 364-8442

あいさつは心のふれあい 出会った人と あいさつしましょう

選挙は必ず投票しよう

大代地区明るい選挙推進委員 渡辺 正平

今や選挙戦たけなわといった感じのにぎやかな日々が今月八日まで続きます。どの候補者もポリウムを最高にあげて一生懸命に選挙公約を訴えています。しかしおおかたの人は無関心と云ったところ、この状況は選挙の投票にも反映している感じがします。

今年も統一地方選挙が四月に二度実施されましたが、その都度投票率は低下しています。この傾向は全国的ですが投票率は五〇%前後とか、三〇%台となっており、二人に一人、三人に一人が投票したことになります。

投票を棄権する理由の多くは、第三者まかせ、排他的考え、自己中心的生活主義者に多くある現象といわれます。しかし棄権者の全てとは云いません、身体的病とか身内に不幸が出たとか、また緊急を要する事故、事件などで棄権する人もおられます。

それにしても現在の投票率低落状態を思うとき、選挙はこれで良いのだろうか？と、考えさせられるからです。

近年、公職選挙法が種々改正されて皆さんが投票しやすく投票時間の延長や入場条件の緩和と不在者投票が容易になるなどの有権者重の対策が図られました。

私達も一人一人が大切な一票を棄権

で無駄にすることのないように権利の行使に努めましょう。指定の投票日に投票できない方は不在者投票日を活用しましょう。

楽しい一日

大代東 本郷 新治

九月二十八日(日) 大代東町内会有

志十六名(男子八名、女子八名)で車

両三台に分乗し七ツ森・大森山薬師堂

(さくら森)五百六メートルに登山を

実施した。年令層も四十・五十・

六十・七十才とさまざまでした。最年

長者は七十八才の星秀雄さんであった。

平均年令も高く六十五才であった。八

時東区集会所を出発する途中大和町伊

達の村、宮床宝蔵を見学、伊達政宗公

の孫にあたる宗房公以来の大和町宮床

は

伊達の小城下町として、また宗房公の

子、吉村公は仙台藩五代藩主となり

(中興の名君)と言われた人、伊達家

縁りの品々が数多く残り、伊達文化が

活きづいていた。十時十分大森山登

山開始、足元は良好とは言えない状態

であったが、汗を流して十一時十分全

員山頂、大森山薬師堂に到着、曇りの

天気、気温も登山には最高であった。

二十分程休憩後下山する。登りより早

い速度であった七ツ森湖公園広場で全

員車座で弁当昼食を取る。その後、台

疲れもすっかり無くなり壮快の気分です。約一時間後、帰途につく。十五時五十分大代東集会所に全員無事到着する。一日中十六名グループはみんな友達気分です。わきあいあいであった。友人を大切に、みんなで協力することが必要であることを強く感じた最高の一日であった。

文芸短評

大代西 藤田 遊子

『かつしかや月さす家は下水端』一茶

小林一茶は二百年程前、信濃町柏原

に生まれ、家庭内に問題があり、江戸

へ出た。月の光が窓の隙間から入るな

ど、下水端のじめじめした場所の家。

生涯貧しい暮らし。よって食うために

奥羽、四国、九州へ旅をし、次の句を

詠んだ。

『三度食う旅もつたいなししぐれ雲』。

豪雪の山村、柏原の雪解けの情景は、

『雪とけて村一杯の子供哉』の句です。

庶民の人気を集めたのは次の句で、

『やせ蛙まけるな一茶ここにあり』。

一茶は五十二才の晩婚であり、自分と

蛙を重ね合わせてイメージしたと思わ

れます。蛙は何をしているのかな。

一茶は七千三百句を詠んだが、悉く

生活句で芭蕉の如く高い芸術性はない

『一茶忌や残さず食べるパンの耳』

遊子

俳句

大代地区 松浦 富男

冷害の畦爛漫の漫珠沙華

彼岸花紅を映して 涼

花野行く児らの歡声空たかく

秋茄子や江戸紫の色と艶

傘さして犬の散歩や秋時雨

笠神地区 本郷 勝子

舞茸を道に迷いて見つけおり

りんどうや青を濃してひっそりと

(白神山)

秋日より海の向こうに鳥海山

(寒風山)

秋陽さす不思議不思議な青池湖

(十三湖)

秋の夜や舌鼓するきりたんぼ

短歌

大代南 本郷 貞子

何時か来し記憶たどるもおぼろにて

やさしく秋の花のこぼるる

大代西 小倉 紀美子

此の春行く先ざきは花に満ち

子等と旅せし回想たのしぶ

大代西 佐藤 あさよ

幼な孫タネまく我れの後から

手先器用に土かけてくる

大代西 小倉 紀美子

浅間山山麓埋める火山岩

(十月号で火山灰は誤りで火山岩に訂正させて頂きます。お詫び申し上げます。)

ご祝儀 お見舞いは 三千元を限度にし お返し物はしなないようにお互い気を配りましょう

シベリヤの想い

「前号に続く」

大代南 後藤 清一

21

先の帰還で隣の友もいなくなり、ぼろぼろと欠けた寝床を見渡し寂しさと俺達の帰還は何時なんだとその焦りは異状なものでした。しかし今ではお互いを思いやる気持も生まれている。

互いに庇いあつて生きながらえようとする思いが自然に出てきた。そんな中で寝床の空きもすぐ補充され、満床となつた。まだまだ未帰還の同胞が多いのに改めて驚く。收容所の近くには国营の農場があり馬鈴薯の畑が果てしなく広がっていた。作業現場への道中監視兵の目をかすめては畑から盗んで食べるものが後をたたない。勿論見つければ相当な体罰は覚悟の上で、收容所や作業現場でみつける「ネズミ」や「蛇・蛙」などは大の「馳走」の部類でこれを食した者は皆から妬まれ一日中話題となつた。

中には毒キノコ、毒草などを食べておかしくなつたり、死ぬ者もいた。我々を最も苦しめたのは作業のノルマだつた。厳しいノルマを超える者は一人もいなかつた。食べものが少ない体力は益々衰え栄養失調で夜中誰にも気づかれずひっそりと死んでいった。人間が死んだかどうかはすぐ解る。それまで体中にびっしりとくらいついた風しよみが一斉に逃げ出すのだ。死体には風はつかないそうだ。

補充された人達は最初の犠牲者であつた。何故なんだ。聞けば入ソ以来風呂もなく着替えもなく行水がすべてこんな環境に誰もが栄養失調は確実に進み、忽ちこの收容所は虱、南京虫の巣となり床に入ればカサカサと音をたてて襲つてくる。シベリヤには春や秋の季節は殆どなく夏から一足とびに冬がくる。ここの二月は寒気のもつとも厳しい月である。作業の往復の道を体を固くして足元をみつめ只とぼとぼと歩く。

辺りの景色に目をやる余裕など誰もいない。三月に入ると寒さの中にも春を感じ注意してみるとやはり春も秋もあるのだと思つた。近くの山々が枯色からほんのり青味を帯びてきた。

もう春だな故郷から便りのきた人もあるし帰還も近いだろう。和らぐ嶺々に自分たちの冬もそう長くないという意味をこめた話は、大きく飛躍する。

だがそんな浮かれ気分ばかりではない。警戒しなければならぬのはソ連の監視兵や作業監督だけでなく日本人達も同じだつた。何時誰がソ連側に密告しないとも限らないからだ。

黒パン一個でソ連側のスパイとなつて仲間の前歴や言動を密告するものもいるといわれた。かつて憲兵だつた事を口走つたために密告されて、本部に連行され相当な制裁をうけた者もいた。

民主運動に積極的に活動した者は早く帰すと噂が流れ一部の人を除いては民主同盟になだれこんだ。

同胞の手によつて民主運動で痛めつけられ死んだ者は白樺の木の根本に埋められたのであつた。これを「白樺の肥やし」といわれ反動分子はその肥やしになれというのが当時の流行語となつていた。死者は犬猫を捨てる様に片づけられた。この人達は今でも暗い奥深い林の中で空腹を抱え家族を慕つて故郷への帰りを待ち続けるのだろうか。

清掃奉仕を終えて

コミニユティ環境美化部長

荒木 慶蔵

去る十月五日(日)各地区から総勢七十名の皆さんのご協力を頂き、早朝六時から貞山運河沿いと、産業道路周辺のごみや空缶拾いを五グループに分かれ、約一時間清掃をしていただきました。事業計画の一環として、春秋二回の美化作業ですが、今回も公民館東側の集積所にはゴミ袋が山と積まれました。住みよい美しい町づくりのため清掃にご参加ご協力くださいました皆さんには大変ご苦勞様でした。

来年度も計画いたしますので、多くの皆さんのご協力をお願いいたします。

秋の火災予防運動

十一月九日～十一月十五日

この油断

火から炎へ

災いへ

